

ほくと遺跡ものがたり

遺跡が語る北斗の歴史 第16回

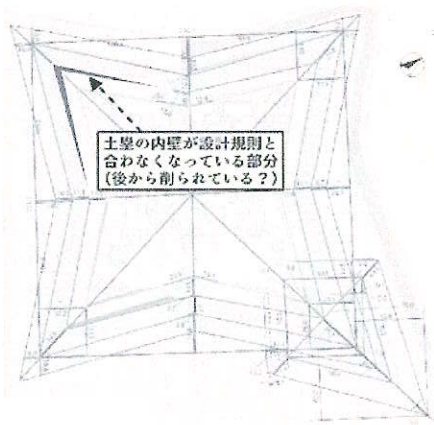
はるかむかし、旧石器時代・縄文時代から現代に至るまで、一万有余年の間こ北斗の地で営まれ続けた人類の歩み―当コーナーでは、こうした北斗の歴史について、「遺跡」に焦点をあてて紹介します。

今回は番外編として、ここ数年研究による評価の刷新が進み、来年度(2025年)には築城170周年を迎える「日本最初の星の城」戸切地陣屋について、新たに判明したトピックをご紹介します。と思います。なお、直近の評価については、教育広報第68号所収の本コラム第10回または当館紀要第1号をご参照下さい。いずれも市HPにて公開中です。

本コラム第10回にて触れたとおり、戸切地陣屋の星形本陣は、一辺200mの正方形とその対角線と等分線を基準とした、洋式軍学教本「サヴァール教本」の法則に忠実に従って設計されています。

しかし、実は、東西南北にのびる各稜のうち西側の稜、その内側だけが現在微妙にその法則から外れたかたちをしています。他の稜が対角線と等分線上の決まったポイントどうしを結んだ対称形をとるのに対し、西稜の内側だけが妙に細く、いうならば本来あるべき形を削られて

図1. 戸切地陣屋の現況のうち平面設計の「法則」と合わなくなっている部分

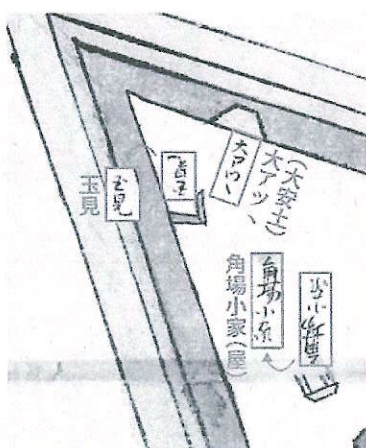


しまっているようなこの状態(図1)。これは、一体なにに由来するのでしょうか。これを探るヒントは、古図面にありました。現在遺されている戸切地陣屋古図面のうち、おそらく最も古い段階で描かれたと見られる函館市中央図書館に所蔵されている「アナタヒラ松前陣屋絵図面」です。この西稜部分を見てみましょう。

図上の該当箇所を見ると「角場小屋」「玉見」「大アツ」の記載があることがわかります(図2)。このうちまず「角場小屋」ですが、これは鉄砲稽古の際の射場、その小屋を指します。次に「玉見」ですが、これは弓道場というところの看的所(射撃の命中を判定したり、使用後の的を取り替えたり、その他備品を備えておく場所)です。図上ではクランク状

の土塁でつくられています。これは鉄砲の弾を防ぐためでしょう(他の同時代の鉄砲稽古場には「玉見小屋」などが見られます)。もつとも頭を悩ませたのは「大アツ」でした。シンプルに読めば「おおあつ」、果たしてこれは何か? 各所調べるうち、埼玉県鉄砲山古墳(旧古墳を江戸時代に鉄砲稽古場として改修した遺跡)における解説の中で「的場のことを安土と呼んだ」という記述を見つけ、謎が解きました。つまり、「大アツ」=「大安土」、大型の的場土塁だったのです。

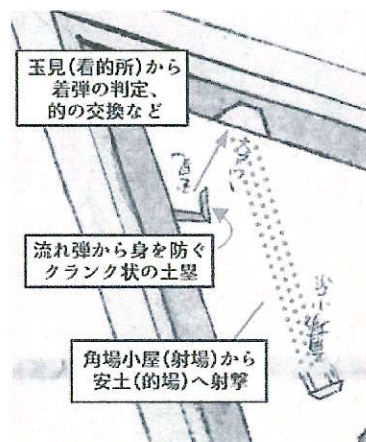
図2. 「アナタヒラ松前陣屋絵図」にみえる「角場小屋(家)」「玉見」「大アツ」の記述



(函館市中央図書館蔵図から引用加筆)

「射場」「看的所」「安土」とくれば弓道をたしなまれる方であればピンとこられたのではないのでしょうか。そうです。この「角場小屋(射場)」と「大安土(的場)」を結ぶライン、そしてその脇に設けられた「玉見(看的所)」から見るに、

図3. 「アナタヒラ松前陣屋絵図」から推定する戸切地陣屋の角場(鉄砲稽古場)の構造



(函館市中央図書館蔵図から引用加筆)

戸切地陣屋西稜には鉄砲射撃の稽古場がかつて設けられていたのです(図3)。

とはいえこの稽古場は長くは用いられず、後年の絵図面では玉見土塁や角場小屋が削られる等により姿を消しています。

「大安土」については、郷土史家の故・落合治彦先生より「自分が子供の頃(昭和20年代ごろか)登り下りできる位の土山があった」との証言があり(先生は砲台と推定していました)、近年まで遺っていたものの削られてしまったようです。研究により見出した戸切地陣屋の幾何学的設計から、現状の違和感を見出し、それを元に史料を再精査することによりまた新たな歴史が明らかとなる。こうした往還も歴史研究の醍醐味です。来年度の築城170周年に向け真価をより明らかにすべく、今後も研究を続けていく所存です。(郷土資料館 時田 太一郎)